

スキニーな身体を読み直す

—— 西洋視覚文化における痩せに対する受容の変化 ——

大木 龍之介

序論

私のママは「サイズについて心配するな」って言ってくれた /
「男の子たちは夜抱きしめるにはもう少し大きなお尻が好きな
んだ」って彼女は言う / 私は棒みたいな体型のシリコン製バー
ビー人形にはならない / だからそれが好きならどうぞ立ち去っ
て (Meghan Trainor, "All about that Bass")

二〇一四年、アメリカのポップ・シンガーであるメーガン・トレイナーの楽曲「オール・アバウト・ザット・ベース」が、米ビルボード・ホット・ワンハンドレッド (Billboard Hot 100) にて第一位を記録した。本楽曲でトレイナーは、自身の体型を「低音 (Bass)」に、いわゆる「痩せた」身体を「高音 (Treble)」にたとえた上で、「棒みたいな体型のシリコン製バービー人形」や「サイズ 2」ではない、「プラスサイズ」の身体を称揚する。二〇世紀初頭以降、痩せた身体は女性美と結びつけられ、到達すべき理想的な身体像として掲げられてきた。しかし一九八〇年代に入ると、メディアが流布する痩せのイメージが女性たちに与える精神的 / 肉体的苦痛につい

て、フェミニズムの立場から批判的に議論されるようになった。「どんなサイズのあなたも下から上まで完璧だ」と歌う 트레이ナーの楽曲のヒットは、痩せを理想化する価値観に疑問を呈し、「ありのまま」の自分の身体を受け入れることを推奨するという点で、一九八〇年代後半以降のフェミニストらの議論や、個々人がボディ・イメージを肯定的に捉えることを推進する「ボディ・ポジティヴィティ」と呼ばれる動きの重要性が、広く認識されていることを示している。

ただし「オール・アバウト・ザット・ベース」には、痩せた身体に対するネガティブな価値観も同時に含まれている。「スキニー・ピッチたちに教えてあげなくちゃ / いや、ただの冗談だけど / 私はあなたたちが自分を太っていると思っていることを知っている」という歌詞では、痩せた女性に「スキニー・ピッチ (skinny bitches)」という蔑称が与えられる。本楽曲のミュージック・ビデオでは、このフレーズに合わせて、スポーティーなＴシャツとパンツ、そしてスニーカーを身に纏ったトレーナーのバックダンサーのうちの一人が、露出度の高いドレスに身を包んだ痩せた女性に向けて尻を突き当て、よろめかせる姿が映し出される。トレーナーをサポートする側の人物であるバックダンサーにとって、「スキニー」な女性は攻撃の対象であり、また弱い存在でもあるということだ。「オール・アバウト・ザット・ベース」は、プラスサイズの身体を称揚する一方で、痩せた身体に「ピッチ」という言葉が示すような軽薄さのイメージを付与する。つまり本楽曲が伝えるボディ・ポジティブなメッセージは、痩せ細った「スキニー」な身体を否定的に描き出すことによって提示されるのである。

本稿は、西洋の視覚文化において、痩せを女性の理想的な体型とみなす価値観と、それを否定的に捉える価値観とが、どのように生

じ、また検討されてきたのかを概観するものである。痩せた身体は、どのようにして女性美と結び合わされてきたのだろうか？ そしてそれが普及する中で、どのような問題が指摘されるようになったのだろうか？ その中で、痩せた身体には、どのような否定的意味が付与されてきたのだろうか？ つまり、ある時代には女性のなるべき「正常」な身体像として理想化されていたスキニーな身体は、どのような過程で見直され、どのようにネガティブな意味づけがなされてきたのだろうか？ そしてこうした社会文化的変化は、西洋のポップカルチャーにおいて、どう描かれてきたのだろうか？ 本稿でわたしは、フェミニズムに端を発する、過剰な痩せを美の理想として提示する美容産業、ファッション業界、そしてメディアに対する批判が、一九九〇年代以前には美の象徴とされていた痩せ細った女性の身体に、「拒食症的」で「ビッチ」な女性という、新たな意味を付与することに繋がった過程を、西洋のポップカルチャーにおけるテキストを横断的に扱いながら確認する。また同時に、一九八〇年代以降にフェミニズムの立場から提示された痩せを理想するメディアに対する批判が、次第にスキニーな個人への批判へと結びつき、そこでは痩せが女性に強いる身体的かつ精神的プレッシャーが後景化される傾向にあることも指摘したい。

1. 一九八〇年代までの「痩せの暴政」

キム・チャーニン (Kim Chernin) は、体型に対する不安を煽り、痩せていることを女性に強いる文化の圧力を「痩せの暴政 (tyranny of slenderness)」と呼んだ (Chernin)。多くのフェミニスト批評家が指摘する通り、痩せは、一九二〇年代および一九六〇年代に、第一波 / 第二波フェミニズムの影響を色濃く受けながら、

美の基準としての立場を固めていった。ここでは二〇世紀以降の西洋で、痩せと女性性がどのような社会文化的背景とともに結びつけられてきたのか、そして痩せていることを女性に強いる社会文化的圧力がフェミニズムの領域でどのように解釈され、どのような問題が指摘されてきたのかを整理する。

一九二〇年代は、欧米の女性たちが参政権を獲得しはじめるとともに、「フラッパー」に代表される胸や尻を強調しない直線的な体型が、「新しい女性」像として流行した時代である。一九二〇年代以前の西洋では、曲線的で丸みがある「多産的」な身体が、官能的でファッショナブルなものとして理想化されていた (Grogan 16)。ヴィクトリア朝の既婚婦人のようなふくよかな身体は、面倒見が良く献身的で、自己犠牲的な女性のものとして認識されていたのだ (Brumberg 242)。しかし二〇年代に入ると、曲線的な体型は「時代遅れ」なものとなり、逆に痩せた身体が「性的な自信、自由や快楽」(242)を示す新しい女性の象徴として肯定的に捉えられるようになった。戦後の広告産業の発達と消費経済の成長の影響下で、ファッション産業によるスタイリングイメージの主流が手書きのイラストから写真へと移行したことや、婦人既製服が主流となり、女性たちがダイエットによって既存のサイズに合わせた体型を維持しなければならなくなったことも、この「新しい女性」の身体像を理想的なものとして普及させた要因と考えられている (Grogan 19 ; Brumberg 237)。さらにアメリカでは生命保険の発達とともに、健康とみなされる体重の基準が定められるようになり、これによって痩せと健康、肥満と不健康とを結びつける価値観が生み出された (Brumberg 231 ; 海野 125-26)。

痩せの理想化と肥満に対する否定的な意味づけは、当時第一波フェミニズムの支持者と反対者の両方によってもなされてきた。エイミー・

E・ファレル (Amy E. Farrell) によると、第一波フェミニズムの渦中で反女性参政権論者が打ち出した風刺画やポスターでは、既存の社会秩序や男女観を揺さぶる女性参政権論者が、大きく太った男性的な女性として描かれ、揶揄されたという (Farrell 83)。すると女性参政権論者はそれに抵抗するため、同じように反女性参政権論者の女性を「太っていて、劣っていて、進歩に反抗する」(83) 人物として揶揄し、肥満に「女性の価値を証明するためにフェミニストらがしてきた全ての困難な仕事を台無しにする」(113) 反女性参政権論者のイメージを組づけようとした。女性参政権論者たちは一方で、自らのキャンペーンに「美しく、白人で、若々しく、そして痩せた」(94) 女性のイメージを採用した。痩せた身体を、男性優位であった公共圏へ参入する能力を持つ、「文明化」されて「自立した」女性の象徴として、打ち出そうとしたのだ。第一波フェミニズムの動きの中でも、痩せた身体が伝統的な女性像とは異なる、自立した女性のシンボルとして利用されたのである。

女性の理想的体型としての痩せは、一九二九年の世界恐慌や一九三九年に勃発した第二次世界大戦の時代に、マリリン・モンロー (Marilyn Monroe) 的な曲線的なシルエットに取って代わられた。海野弘が指摘するように、女性が家庭に押し戻されたバックラッシュの時代に、女性の理想的な身体像も伝統的なものに回帰したのである (海野 153)。しかし大戦後の一九六〇年代、再び痩せた身体が女性美の象徴として復権することとなる。その契機を作ったのが、イギリスの労働者階級出身のモデル、ツイッギー (Twiggy) だ。「世界中で名前が知られた最初のモデル」(海野 182-83) である彼女の、文字通り枝のように細い身体は、多くの女性にとって羨望の対象となり、社会現象にもなった。これは第二波フェミニズムと時を同じくしており、海野弘はツイッギーのように若く、女性的な曲

線を削ぎ落したスキニーなシルエットの流行について、女性が「成熟した女らしさという、女性に押しつけられた役割を拒否し、まだ性差の未分化な少女にもどろうと」(184) するものだったと評している。同時期に活躍したジェット族の影響も大きく、二〇年代にはまだ中流上流階級の人々の間での流行であった痩せが、彼／女らの登場によって「自由を意味し、どんな階級の人でも達成できること」(Orbach 97) として普及した。

一九七〇年代に入り、食、栄養管理、ダイエットが一般生活の中に組み込まれるようになると、八〇年代には、ただ痩せているだけでは魅力的ではなくなり、フィットネス、トレーニングやエクササイズによって「調整された引き締まった身体、強くなっていく身体」(Freedman 256-57) が称揚された。このことは、当時人気を博したアメリカの女優であるジェーン・フォンダ (Jane Fonda) や、映画『フラッシュダンス (Flashdance)』(一九八三) のジェニファー・ビールス (Jennifer Beals) の体型にも表れている。スーザン・ボルドー (Susan Bordo) は『耐え難い重さ (Unbearable Weight)』(一九九三) 所収の「スレンダーな身体を読む ("Reading the Slender Body")」にて、この時期に体型やサイズが「個人の情緒的、道徳的、精神的状態の象徴」(193) として、つまり個々人の内面を表すものとして捉えられるようになったと書く。身体的な苦痛を伴うダイエットやトレーニングによってあらゆる贅肉を削ぎ落した、細く引き締まった身体が欲望に打ち勝つ「意志と精神的な誠実さ」(196) を意味するようになり、逆に肥満は欲望をコントロールできない「欲張りで、自己陶酔的で、怠惰で、自制心や意志の力がない」(202) 状態を表すものとして受け取られるようになったのだ。ボルドーは八〇年代のタイトな身体や自己管理というメタファーが「(白人) 男性」のものとしてコード化されていることにも注目

し、自己管理能力＝男性性の象徴としての引き締まった身体を手に入れることが、既存の女性観からの解放とともに、公的で男性的な場面で活躍する権能を手に入れることと結びつけられていたことを指摘している（211-12）。ただし八〇年代は、美容整形が一般化し、固く引き締まった体に大きな胸を持つという一見矛盾するような身体が豊胸手術によって実現された時代でもある（Wolf 292）。この意味で、八〇年代の理想的な身体像とは、単にボルドーの言う凹凸のない男性的な身体というよりも、男性的でありながら女性的な特徴も持つ身体という、矛盾に満ちたものであったと言える。

二〇年代と六〇年代以降に流行した痩せたシルエットは、いずれも女性の社会進出の文脈で美と結びつけられたが、七〇年代後半になると、それがもたらす危険性が一般に知られるようになる。一九七八年、ダイエットを機に摂食障害へと陥る少女を描いた、心理療法師であるスティーヴン・レヴェンクロン（Steven Levenkron）によるヤングアダルト小説『鏡の中の少女（The Best Little Girl in the World）』がヒットし、一九八一年に映像化された。また一九八三年には、レヴェンクロンの患者の一人であり、アメリカのポップデュオであるカーペンターズ（The Carpenters）のボーカル、カレン・カーペンター（Karen Carpenter）が長期に渡るダイエットの結果拒食症で命を落とし、大きなニュースとなった。彼女の死は「ダイエットには、死に至る病という相があること」（海野 226）、つまり拒食症に代表される摂食障害を誘発する側面があることを、世に広く知らしめた。

すると美の基準としての痩せに対する懐疑的な見解が、フェミニズムの領域で次々と打ち出されはじめた。摂食障害を専門とする臨床心理療法師のスージー・オーバック（Susie Orbach）は、新時代のキャリア・ウーマン像として提示された痩せ理想が、女性たち

の身体に対する否定的な感情を煽り、ダイエットやエクササイズに没頭させ、摂食障害を誘発していることを指摘した (28)。リタ・フリードマン (Rita Freedman) の言うように、痩せ細った美の基準は、そこに到達して新たな女性らしさを獲得しようとダイエットに励む女性たちの意図とは裏腹に、偏執的な摂食行動と運動の繰り返しによって、彼女たちの身体から性的な成熟の徴候を削ぎ落とし、月経を止め、摂食障害へと追い込む (245)。ナオミ・ウルフ (Naomi Wolf) はこの構造を、「権力に手の行き届きかけた女が弱くなるよう、他のことに関心を移すよう、やがては驚くほどの割合で効果的に精神が病むように図」(217) る、男性中心社会を維持するための「美の神話」と呼び、激しく批判した。サンドラ・バートキー (Sandra Bartky) は、女性が自らより細く小さな美の基準に適合するよう仕向ける社会文化の構造を、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) の言う「規律訓練」として捉える。規律訓練的な文化において、女性は自らの身体を自己監視し、身体上の欠点を見つけ、積極的にそれを修正し、(異性愛的な)「女性らしさ」を具現化するように要請される。ゆえにバートキーは、この身体の恒常的な自己監視を、「家父長制への服従の一種」(149) として批判した。同じくフーコーの理論に議論の礎を置くボルドーは、西洋文化における美の表象が、アングロサクソン系の白人美に合わせて「均質化」され「規範化=正常化」されていることを指摘する (25)。その上でボルドーは、拒食症を伴う痩せの追及の根底に、性的欲望のメタファーとしての食欲の抑圧を女性らしさと結びつける、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーが引き継がれていることを見抜いた (112)。伝統的な価値観を脱ぎ捨てた新たな女性の象徴として一九二〇年代に台頭したスレンダーなシルエットは、実は女性に対する抑圧構造が文字通り「外見」を変えただけのものであり、

そして摂食障害の引き金になるものだということが、フェミニズムの立場で再考されたのである。

一九二〇年代に生じた「痩せの暴政」は、一九六〇年代以降、フェミニズムの隆盛とともに再び猛威を奮ったが、八〇年代に入ると、その影響力がフェミニズムの内部で批判的に検討されるようになった。痩せ細った身体は、外見上は伝統的で多産的な女性像からの解放を意味するものの、しかし実は女性の関心を 身体がどのように見られるか ということへと向け、彼女らを身体的にも社会的にも弱体化し、病へと追いやるものであるという意味で、二面的なものであったのだ。八〇年代におこなわれたフェミニストたちによるこうした議論は、一九九〇年代後半以降、西洋のメディアが提示する身体像に対する批判が社会問題と化すことに繋がっていく。

2. 拒食症的で「スキニーな身体」

二〇〇七年、イタリアのファッション・ブランドであるノリータ (Nolita) が、ミラノのファッション・ウィークで物議を醸す広告を発表した。そこでは、骨が浮き出るほどに痩せこけた四肢を剥き出しにした、フランス出身モデルであるイサベル・カロ (Isabelle Caro) — 彼女は長年拒食症を有病しており、二〇一〇年に命を落とした — が、大きく見開いた眼をこちらに向けている。イタリアの写真家であるオリヴィエロ・トスカニ (Oliviero Toscani) によって撮影されたこの写真には、カロの羸瘦状態にある身体を挟むように、「拒食症にノーを (No ANOREXIA)」の文字が並べられる。ファッション産業が理想化する過剰な痩せの弊害を摘発するこの広告はしかし、イタリアにて「行動規範に背く」ものと判断され、その掲示が禁じられた ("Italy Bans ■No Anorexia■ Poster")。

ジャック・ランシエール (Jacques Rancière) が指摘するように、痩せを美しさと結びつける見解を「許しがたいもの」として批判したはずのこの広告は、皮肉にもそれ自体が「許しがたいもの」と見なされたのだ (108)。本節では一九九〇年代後半以降に隆盛した、メディアと摂食障害との関係についての議論が、次第にスキニーな身体を、拒食症を想起させる「許しがたいもの」として捉える価値観の形成に繋がっていったこと、その一方でダイエットやエクササイズを通して痩せることが、依然「なされるべきこと」として肯定されてきたことを確認したい。

一九九〇年代は、スーパーモデルが席卷した時代である。それを象徴するモデルのひとりに、ケイト・モス (Kate Moss) がいる。同じく当時人気を博した「ビッグ・ファイブ (the Big Five)」と呼ばれるモデルたち——シンディ・クロフォード (Cindy Crawford)、クリスティー・ターリントン (Christy Turlington)、リンダ・エヴァンジェリスタ (Linda Evangelista)、クラウディア・シファー (Claudia Schiffer)、ナオミ・キャンベル (Naomi Campbell)——の胸を強調しつつも引き締められた、八十年代風の痩せた身体とは異なり、彼女の体型は六〇年代のツイッギーを彷彿とさせる、より細いストレートなシルエットだった。この「ウェイフ (waif)」と呼ばれた外見の彼女は、ヘロイン使用者を思わせる青白い肌、ダークカラーのアイメイク、マットな肌質を特徴とする「ヘロイン・シーク (heroin chic)」のスタイルの流行とともに、一躍人気モデルとなった。

しかし九〇年代後半になると、当時の米国大統領であったビル・クリントンが、ヘロイン・シークが若者のヘロイン使用を「グラマラスで、セクシーでクールなもの」として推奨していることを批判した (Wren)。するとウェイフ・モデルのひとりであったエマ・

バルフォア (Emma Balfour)らのモデルたちも、「中毒者」のような痩せを強いるファッション産業を批判しはじめた (Grogan 23)。ケイト・モスのように痩せこけた身体を理想化することの危険性が、ヘロインの文脈で唱えられるようになったのだ。

また二〇〇〇年には、当時イギリスの政治家であったテッサ・ジョウエル (Tessa Jowell) が、モデル・エージェンシーやティーン向け雑誌の責任者、そしてスージー・オーバックら摂食障害の専門家を招集し、メディアが理想化する痩せたモデルたちの身体と観客の摂食障害発症リスクとの関連性について議論した ("Government Summit over Thin Models")。二〇〇六年になると、イタリアではBMI 一八.五以下のモデルがキャットウォークへの出演を禁じられた。ザ・ガーディアンによれば、「目の下の暗いアイシャドウを伴う拒食症的な外見に到達するためのメイクアップの使用」、すなわちヘロイン・シーク的なファッションの提示も同時に禁じられたという (McMahon)。二〇〇七年にはアメリカファッション協議会が、摂食障害と診断されたモデルは専門家の承認なしにモデル活動を再開できないという旨を含むガイドラインを発表した ("Initiative for Health, Safety, and Diversity")。過剰に痩せたモデルをファッションの文脈で提示することは、観客の劣等感を煽り、摂食障害を伴う過度なダイエットを推進する。特定のBMI以下であることと摂食障害であることとはイコールではないし、「過食症」として知られる神経性過食症の人々の身体が表すように、摂食障害であるからと言って羸瘦状態にあるとは限らないが、ファッション業界が観客に与える影響が、この時期に検討されるようになったのだ。

同時に、過剰な痩せを理想化する思想そのものも、摂食障害を扇動するものとして批判を浴びるようになる。ケイト・モスによるあ

る発言とそれに対する反応は、このことを示す一例である。二〇〇九年、ファッションメディアのひとつである WWD のインタビューにて、モスは「スキニーが感じるほど美味しいものなんて何もない ("Nothing tastes as good as skinny feels.")」と発言した (Costello)。彼女の発言は物議を醸し、イギリスのモデルであるケイティ・グリーン (Katie Green) は、それを「ショッキングで無責任だ」と批判した ("Kate Moss Criticized after Skinny-is-Good Remark")。モスの発言が批判されたのは、単に彼女が自身の痩せ細ったスキニーな身体を称賛したからではなく、その発言が「プロアナ (pro-ana)」と呼ばれる集団のウェブサイトで広く用いられたからである。プロアナとは、拒食症を治療すべき病ではなく、ライフスタイルのひとつとして捉える思想を指す言葉である (Reel 366)。一九九〇年代後半にインターネット上で増殖したプロアナのウェブサイトには、いかに拒食を続けるか、そのためにいかに家族や医師を欺くかのヒントやコツとともに、痩せ細った体型をしたモデルたちの写真や発言が掲載された (366)。こうした画像や格言は、拒食を続けるモチベーションを刺激する「シンスピレーション (thinspiration)」と呼ばれ、とりわけモスの写真や前出のスローガンは、プロアナのウェブサイトで広く引用された。グリーンの批判はプロアナにおけるモスの位置づけを考慮したものであり、ゆえに彼女はモスの「スキニー」な発言を、「より多く (の摂食障害) を引き起こしかねない」(Holden) と批判したのだ。

プロアナのウェブサイトは、モスの発言同様に物議を醸し、とりわけそれらのウェブサイトを訪れた有病者の病的な摂食行動を煽り、彼/女らを回復から遠ざけていることが問題視された (Rouleau & Ranson 525)。二〇〇一年、米国摂食障害協会のホリー・ホフ (Holly Hoff) の訴えを受けて、検索エンジン大手のヤフー! はブ

ロアナのウェブサイトをサーバー上から削除した (George)。二〇一〇年代にはソーシャルメディアでも摂食障害を肯定的に捉える投稿を禁止する動きが強まり、タンブラーは二〇一二年に「拒食症、過食症、その他摂食障害を賛美または促進するブログ」を「自傷を積極的に促進する」ものとして禁じる方針を打ち出した ("A New Policy Against Self-Harm Blogs")。摂食障害はライフスタイルではなく自傷であり、またそれを肯定することは見る側の病を扇動するものである——この価値観のもとで、プロアナの思想はそれ自体が、摂食障害を「伝染」させ「増加」させるものとして、いわば「おぞましきもの」として棄却されたのである。

社会人類学者のメーガン・ワリン (Megan Warin) は、摂食障害患者が食べ物や身体の性的特徴 (豊満な身体と月経) を「おぞましきもの」として嫌悪し、その浄化行動として拒食をおこなう様子を、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の「アブジェクション (abjection)」——「おぞましきもの」を棄却することで「わたし」が主体形成されていく過程——として捉える。クリステヴァが説明する通り、「おぞましきもの」とは「同一性、体系、秩序を攪乱」(7) するものである。だとすれば、プロアナの存在それ自体も、病は治されるべきであるという秩序を攪乱するものであり、ゆえに棄却されたのだと考えられるだろう。それは本節冒頭で示した、ノリータにおけるカロの身体も同じである。デブラ・フェレデイ (Debra Ferreday) が書くように、拒食症の骨が浮き出るほどに痩せこけた身体は、不気味で恐ろしい「ホラーの対象」(9) として想像される。この意味で、「ホラーの対象」としての拒食症の身体を前面に打ち出したノリータの広告は、それが文字通り「おぞましきもの」であるがゆえに、スペインでの掲示が棄却されたかと捉えられる。つまり二〇〇〇年代には、「スキニー」な思想だけでなく、拒食症を

想起させる痩せ細った身体を映し出すこともまた、「許しがたいもの」として批判的に検討されるようになったのである。

ノリータの広告のような、特定の身体に病のイメージを重ね、それを治療されるべき「おぞましきもの」として描き出す手法は、二〇〇八年から二〇一四年にかけて放送されたイギリスのテレビ番組『スーパーサイズ・ヴァーサス・スーパースキニー (Supersize vs Superskinny)』にも見て取れる。この番組の各エピソードには「スーパースキニー」と呼ばれる非常に痩せた人物——その多くは女性である——と、「スーパーサイズ」と呼ばれる極めて太った人物の二人が登場する。彼／女らを見守る医師は、それぞれに痩せと肥満による健康上のリスクを伝えた上で、「正しい」食事や運動に関するアドバイスを与え、彼／女らを健康的で「正常」な体型へと「矯正」していく。この番組は、ダイエットに取りつかれるスーパースキニーたちに拒食症のイメージを重ね合わせる。このことは、番組のオープニングを観ると分かりやすい。本番組第一シーズンのオープニングでは、「超スキニーになることを夢見たことはある？」というボイスオーバーとともに、ランウェイを歩くスーパーモデル達の姿が映し出される。その直後、カメラはイザベル・カロの羸瘦状態にある身体——おそらくノリータのポスター撮影時の様子だと思われる——が映し出され、「考え直した方がいい。私たちは流行病に取りつかれている」という警告が重ねられる。カロの撮影の様子は白黒で映し出され、そこには同時に不気味な音楽が流れる。そしてシーンが切り替わると、ボイスオーバーは「スーパースキニーになるという最新の流行はたくさんの若者を新たな危険地帯に押し込んでいる」と説明し、同時にそこには番組に登場するスーパースキニーたちの、痩せ細った全身が映し出される。つまりこのオープニングは、スーパースキニーたちがランウェイを歩くモデル達のように

な体型を夢見てダイエットを開始した結果、「流行病」に取りつかれ、カロの身体が象徴する拒食症という「危険地帯」に押し込まれつつある、というナラティブを形成しているのである。出演者が有病者であるか否かに関わりなく、過剰に痩せた身体を摂食障害のイメージと結びつけるこの構図は、サンダー・L・ギルマン (Sander L. Gilman) が説明する「病めるものは醜いというばかりでなく、醜いものは病んでいる」(Health and Illness 62) という、一九世紀末以降の西洋における「美／醜」と「健康／病」の関係を引き継いでいる。つまり有病者であろうとなかろうと、スキニーな身体は拒食症「的」で病んでおり、ゆえに醜いという価値観が、『スーパーサイズ・ヴァーサス・スーパースキニー』には反映されているのだ。

しかし『スーパーサイズ・ヴァーサス・スーパースキニー』が提示するのは、スキニーな身体を拒食症と結びつける見方だけではない。前述の通り、この番組は「スーパースキニー」と「スーパーサイズ」のふたりを医師の管理下に置き、彼／女らに適切な食事方法、適切な運動方法を教え込む。痩せすぎていることと太りすぎていることは、いずれも「不健康」で治療されるべきものと見なされるのだ。そして両者はプログラムを通して、痩せすぎではないが太ってもいけない体型へと「矯正」される。ここでは過剰な痩せを摂食障害と紐づけて問題視する一方で、何を食べるかを選択し、日常的に運動をおこなうことで、「適切」な体型を維持しろ、さもなければお前の身体は「病的」なものとして治療される、というメッセージが発せられる。過剰な痩せを理想化するメディアをその内部から批判しているかのように見えるこの番組は、実際のところ体型を「適切」に——痩せすぎではないが決して太ってもいけない「正常」な姿に——管理すること、すなわち「健康」とみなされる体型になるた

めの自己管理能力を持つことを、出演者と視聴者に要請する。このようなメッセージは、前節でスーザン・ボルドーを引用しつつ説明した、肥満と自己管理能力の欠如とを結びつける見解に、拒食症的でスキニーな身体の項目を加え、そしてそれらに病的なイメージを重ねただけのものであり、個々人に向けられる体型の恒常的管理というプレッシャー自体は、実際のところ消え失せるどころか、維持されているのである。

九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて、極端に細い身体を称揚する価値観が受け手にもたらす危険性が、「摂食障害」というキーワードをもって見直されるようになった。そして過剰な痩せを賛美するスキニーな思想に対する批判は、スキニーな身体を、拒食症的でおぞましく、「許しがたいもの」として捉える見解を生んだ。ところがスキニーな身体が病理化される背後で、食事制限や運動によって「健康」的な体型を維持しろという号令自体は、根強く保持され続けていた。アビゲイル・ブレイ (Abigail Bray) が指摘する通り、こうした痩せ細った身体の病理化は、たしかに「メディア表象に対して病理学的に影響を受けやすい女性観客」(422) というステレオタイプに依拠していると言えるだろう。しかし九〇年代後半になると、この外見にばかり気を配るというステレオタイプを体現する女性たちが、彼女らを嘲笑するという形式を取って、メディアの内部で批判されるようになっていく。

3. 「スキニー・ビッチ」 痩せているバカな女

二〇〇五年、ロリー・フリードマン (Rory Freedman) とキム・バーノウィン (Kim Barnouin) によるヴィーガン・ダイエットの指南本、『スキニー・ビッチ (Skinny Bitch)』(二〇〇五) が発売

され、人気を博した。フリードマンとバーノウインは本書の中で、「スキニー・ビッチ」を「自分の軸をしっかりと持っている、いい女」(187)と定義する。前節で確認したような、スキニーな身体を病的なものともみなす見解が存在する傍ら、依然それを女性美と結びつける価値観があったということだ。一方で二〇一四年、アメリカのラップ歌手であるニッキー・ミナージ (Nicki Minaj) は、「アナコンダ ("Anaconda")」という楽曲を発表した。「彼はこの太ったお尻が大好き」と歌う彼女は、アマゾンをおわせる雨林の中で、自身のバストとヒップ、そして引き締まったウエストをリズムカルに動かし、曲線的な身体を異性愛的な性的魅力と結びつける。そこでミナージは、「クラブのスキニー・ビッチたちはくたばっちまえ」と、痩せた女性を「スキニー・ビッチ」と呼び、攻撃する。本節では、二〇〇〇年代以降のポップカルチャーの内部で、いかに食事に気を配り、ダイエットに励み、「最高にクールな音楽をバックに、スリムなお尻をひけらかして街を歩く」(Freedman & Barnouin 10)「スキニー・ビッチ」が、嘲笑や攻撃の対象となっていたのかを追っていきたい。

二〇〇〇年代は、ビヨンセ・ノウルズ (Beyoncé Knowles) 率いるアメリカのガールズ・グループ、デスティニーズ・チャイルド (Destiny's Child) のような、ヒップを強調した「非白人」の曲線的な身体が人気を博した時代である。「尻 (Booty)」と「美味しい (Delicious)」を組み合わせた造語である「ブーティリシャス ("Bootylicious")」(二〇〇二) なる楽曲で、彼女たちは尻のセクシーさを強調するダンスを披露し、その身体の曲線を称揚する。サマンサ・C・スリフト (Samantha C. Thrift) が言うように、彼女たちは「原始的」で、過剰に性的で、動物的なアフリカン・アメリカン女性の曲線的な身体というステレオタイプに、女性の性的主体

性というプロ・フェミニスト的主張を結びつけたのだ(108)。このモチーフは、先に挙げたミナージの「アナコンダ」にも引き継がれている。またデスティニーズ・チャイルドの「インディペンデント・ウーマン・パート1 ("Independent Woman Part I")」(二〇〇一)やビヨンセ個人名義の「ラン・ザ・ワールド(ガールズ) ("Run the World (Girls)")」(二〇一〇)の歌詞やミュージック・ビデオを見ても分かる通り、彼女らの曲線的な身体には女性の独立のイメージも重ねられる。

こうした身体がケイト・モスのような拒食症的でスキニーな体型とは視覚的に異なっているにもかかわらず、スーザン・ボルドーが指摘する通り、「セクシーな尻」は「それが高く硬く、そして他の身体の部位がしっかりと管理されている場合にのみ」(xxii)許容される、つまり恒常的な体型管理によってのみ到達される以上、それは美の基準からの解放を意味しない。スリフトは、デスティニーズ・チャイルド時代のビヨンセについて、あくまでも「まっすぐなヘアスタイルや、明るい肌のトーン、そして(ビヨンセの尻を除いて)ボーイッシュでスキニーな体型とともに、支配的な北米大衆音楽文化のホワイトウォッシングな市場慣習」(122)に即していたのだと書く。ビヨンセ的な身体は、体型の多様性を示すものというよりは、むしろ均質化されたアングロサクソンの美的基準が、勢いを増した結果だったのであり、体型の恒常的管理というプレッシャー自体は消え失せてなどいなかったのである。

一方で二〇〇〇年代は、痩せた身体セレブリティを揶揄する言説が増殖した時代でもある。この時期になると、白人セレブリティのファッションやセックス・ライフ、ドラッグの使用、事故や事件といったスキャンダラスなライフスタイルが、ゴシップ誌やウェブサイトを通じて。そうしたゴシップには、彼女たちの痩せた身体

を摂食障害と関連づけるものも数多く存在した。イギリスのデイリー・メールは、パリス・ヒルトン (Paris Hilton)、リンジー・ローハン (Lindsay Lohan)、ブリトニー・スピアーズ (Britney Spears)、アンジェリーナ・ジョリー (Angelina Jolie)、マーシャ・クロス (Marsha Cross)、ジェシカ・シンブソン (Jessica Simpson) らの写真とともに、セレブリティの体型がドラッグの服用、過剰な食事制限、下剤の乱用、喫煙、カフェイン、そして運動によって維持されているのだと報じた (Pearson)。摂食障害専門のセラピストとして知られるキャロリン・コスティン (Carolyn Costin) の言葉を引用することで、この記事は痩せたセレブリティの身体を、明白に「健康 = 美 / 病 = 醜」の二項対立における後者の項に位置づけている。

こうしたセレブリティのスキニーな身体には、しばしば「バカな女」のイメージも重ねられる。このことを顕著に示しているのが、アメリカのポップ・シンガーであるピンク (P!nk) の楽曲、「ステューピッド・ガールズ ("Stupid Girls")」(二〇〇六) だ。「あんな風に振舞ったら / あの男も私に電話を掛け直してくれるかも / ボルノでパパラッチみたいな女たち / 私はバカな女にはなりたくない」と歌う本楽曲のミュージック・ビデオにて、ピンクは二〇〇〇年代に人気を博した前出のセレブリティを想起させる姿に扮し、彼女らのライフスタイルやゴシップを再現する。「ブロンドの髪を後ろになびかせて / あんな風にブラを押し上げて / バカな女」という歌詞からも分かるように、彼女にとっての「バカな女」はブロンドの白人を含意する。ピンクが演じる彼女たちは、フレッド・シーガルでの買い物を楽しみ、男性ラブ歌手の横でセクシュアルなダンスをし、子犬を可愛がり、日焼けサロンに通い、美容整形手術を受け、胸を強調した衣服を身に着ける。曲の後半になると、フラッパーを想起

させるドレスにヘロイン・シーク的なメイクアップを施したピンクが、「最悪、ねえ、私合計で 300 カロリー以上も摂っちゃった。セクシーじゃない」と語りつつトイレに現れ、「スキニーになりたい」と叫びながら洗面台に食事を吐き出す。またジムでランニングに勤しみながら、男性トレーナーと親密そうにする他の女性に嫉妬の眼差しを向けるピンクは、彼らに気を取られるあまりトレーニングパンツが脱げてしまうのだが、そこでは「食べ物にノーを (SAY NO TO FOOD)」というメッセージが書かれた下着があらわになる。ピンクが歌詞の中で「流行病」と呼ぶ「バカな女」の行動には、美容、セックスアピール、ダイエット、エクササイズ、そして摂食障害が含まれるのである。

セレブリティの行動を揶揄する一方で、ピンクは「女性大統領になるっていう夢はどうなった?」、「野心を持ったのけ者や少女たち / 私が見たいのはそういうもの」と歌う。ミュージック・ビデオはテレビの前に座る少女の姿からはじまり、彼女の右手前にはフットボール、顕微鏡、コンピューター、本が、そして左手前には人形やメイク道具が置かれている。すると少女を挟むように、白色のオーラを纏ったピンクが右側に、炎に包まれた黒髪のピンクが左側に現れる。この天使と悪魔のモチーフのもとで、黒髪のピンクはテレビに映し出される「バカな女」たちの姿を笑顔で応援し、白色のピンクはそれに対して露骨な嫌悪感を示す。またミュージック・ビデオでは、フットボールで男性プレイヤーに打ち勝つピンクの姿を、大統領に扮したピンクが褒め称える姿も映し出される。曲の終盤、最終的に少女が人形遊びではなくフットボールを選択すると、黒髪のピンクは消え、白色のピンクもピースサインとともに姿を消す。つまりピンクが歓迎するのは、「バカな女」たちのように外見やセックスに没頭せず、高い政治的関心を持ち、勉学に励み、スポーツで

男性を打ち負かす力を持った女性なのである。

ピンクが「ステューピッド・ガールズ」で肯定する女性像は、第三波フェミニズムの、とりわけ「ガール (grrrl)」の思想を体現している。八〇年代に生じた第二波フェミニズムに対するバックラッシュを経て、九〇年代初頭には人種、民族、階級、セクシュアリティの観点からジェンダー問題を見直す動きが強まると同時に、パンク風ファッションに身を包んだ「ライオット・ガール (riot grrrl)」と呼ばれる女性が存在感を増した。彼女らは「ジン (zines)」と呼ばれた雑誌で、特定の体型を善しとする価値観に疑問を呈し、「女性美の病的に痩せ細ったイメージを、怒りと同様にユーモアを通じて攻撃し、太った身体を、好ましく、美しい女性の姿として再利用しよう」と試み (Piepmeier 96) たという。またクレシダ・J・ヘイズ (Cressida J. Heyes) は、痩せるためにダイエットをすること自体が「典型的に女性的で、白人で、中流階級で、異性愛的な」価値観への没頭として捉えられており、ゆえに彼女はダイエットをすることやそれについて書くことに第三波フェミニストとして「罪悪感を覚えた」(66) と書く。それは、ジュリー・ガスマン (Julie Guthman) とメラニー・デュブイ (Melanie Dupuis) が言うように、痩せていることが「ヘテロセクシュアリティ、さらに言えば白さと同じように、一般的に当たり前のもの」(434)、すなわち「規範的」で「特権的」なものと考えられていたからだ。あらゆる規範性を疑問に付すクィア理論と足並みを揃える九〇年代以降の第三波フェミニズムの文脈に置かれたとき、痩せた身体は、そして痩せることそれ自体も、反フェミニスト的なものと見なされ、批判の対象となる。ピンクの「ステューピッド・ガールズ」の歌詞とミュージック・ビデオもまた、「ライオット・ガール」を想起させるタフな女性を歓迎する一方で、痩せを特権化する美の基準の影響を積極的に

受ける女性たちを「バカな女」として攻撃しており、この点で第三波フェミニズムの動きと共鳴していたのだ。

「バカな女」の象徴としての痩せを人種、階級、セクシュアリティの規範性と結びつける傾向は、二〇〇〇年代のティーン・ムービーからも見て取れる。数多くのティーン・ムービーをパロディした、『あるあるティーンムービー (Not Another Teen Movie)』（二〇〇一）では、裕福でない家庭で育った「イケてない」主人公のジェイニー（Janey）が、「学校で最も人気のある女の子になりたいと思ったことはない？」との質問に、「本物の長期的なゴールがない、拒食症みたいで、薄っぺらくて、ピッチな、ふしだらな女のこと？」と答える。そのタイトルにあるように、ティーン・ムービーの典型的な女性像を皮肉るこの価値観は、リンジー・ローハン主演の映画『ミーン・ガールズ (Mean Girls)』（二〇〇四）にも採用される。動物学者の両親とともにアフリカで生活が続いていた数学好きの主人公ケイディ（Cady）は、シカゴの高校に入学し、ゴス風ファッションに身を包むレズビアンのジャニス（Janis）、ゲイのダミアン（Damian）らと仲良くなる。しかしケイディは同時に、学園の人気者であり「パービー人形のように」と評されるレジーナ（Regina）を中心とした、「プラスティックス」というグループにも仲間入りする。映画はレジーナの学園における人気を、非白人で、太っていて、障害を持つ、非規範的な身体 of 学生らに語らせることで、規範と非規範的な身体 of 差異化を図る。プラスティックスは、高級ファッションに身を包み、クールな男子学生との恋愛に関心を寄せ、ダイエットに励む。ケイディは次第にプラスティックスと同じような自己中心的行動が目立つようになり、ジャニスとダミアンと距離を置くことになるが、最終的にはプラスティックス的なファッションを脱ぎ捨て、数学大会で優勝する。同じくレジーナも、プラ

スティックスの解散後、ラクロスクラブに所属し、練習に勤しむようになる。勉強やスポーツに打ち込む姿こそが素晴らしいというメッセージを発する一方で、『ミーン・ガールズ』は、ファッションと恋愛、そしてダイエットに没頭する女性を、白人で、中流階級で、異性愛者で、シスジェンダーの「スキニー・ピッチ」として描き、それを是正されるべきものとして提示する。つまり、覇権的なものの縮図としての「スキニー・ピッチ」の身体には、第一波フェミニズムの年代に太った身体的女性へ与えられたものとよく似たイメージ、つまり「女性の価値は外見ではなく中身にあるのだというフェミニストらの主張を台無しにする」ような、反フェミニストのイメージが付与されるのである。

「スキニー・ピッチ」に対する批判的態度はしかし、他の多くのフェミニズム関連の騒動と同じように、ロザリンド・ギル (Rosalind Gill) の言葉を借りれば「つねにすでに矮小化されたかたちで提供される」(163)。つまり「ステューピッド・ガールズ」でも『ミーン・ガールズ』でも、八〇年代にフェミニスト達が懸命に指摘し続けた表象が個人に与える問題が、文字通り「個人の問題」の領域に還元され、その批判の矛先が女性に痩せを強いる社会文化、消費経済、広告産業から、スキニーな個々人へと変えられているのである。アメリカの歌手であるテイラー・スウィフト (Taylor Swift) は、自身のドキュメンタリー映画、『ミス・アメリカーナ (Miss Americana)』(二〇二〇) にて、過去に抱いていた自らのボディ・イメージに対する不安を吐露する。自身の過去の体型を振り返りつつ、いかに自分が痩せることに固執していたか、摂食障害に苦しめられたかを語る彼女は、今では「病的に見えることよりも太って見えると思うことの方がマシ」だと感じていると発言し、フラットな腹部と突き出た臀部が共存するような理想的とされる身体

は到達不可能なものであると指摘する。そして彼女はこう言うのだ——「あの頃は分かってなかったの」と。過去の彼女の拒食症的な身体に潜む病理は、彼女自身が「分かってなかった」ことに還元され、ここでは彼女自身が属するメディアが女性に強いる、美への適合という圧力が後景化される。また彼女が拒食症的な身体を省察した直後、映画は過去のスウィフトを「自意識過剰」、「ムカつく女」、「いい子ちゃんで痩せすぎ」、「(男を) とっかえひっかえ」と嘲笑したコメンテーターらの姿を映し出す——彼女が「スキニー・^{痩せている}ビッチ」^{バカな女}として認識されていた事実を、悲劇的に裏付けでもするように。アニタ・ハリス (Anita Harris) は「フェミニストの考えとイメージが、政府や巨大ビジネスや消費文化によって部分的に吸収され脱政治化されてしまう」(208) 現代の傾向を危惧しているが、ここではフェミニストが矛先を向けた巨大ビジネスや消費文化のつくり出す美の象徴としての痩せのイメージと、それが個々人の身体と精神に与える悪影響への批判が、「スキニー・ビッチ」のセレブリティ個人に対する非難へと吸収され、同じく脱政治化されていると言える。

スウィフトに「痩せすぎ」と発言したコメンテーターは映画の公開後に謝罪し (Gariano)、また 트레이ナーや ミナージ の一見曲線賛美的な楽曲はいずれも「スキニー・ビッチ」という言葉を使用したことで「スキニー・シェイミング」、つまり痩せた人への無配慮な発言や嘲笑だとして批判を浴びた (Adegoke)。しかし、スキニー・シェイミングは、痩せを霸権的なものの縮図の文脈に置いたとき、その可傷性が後景化される傾向にある。メリッサ・A・ファベロ (Melissa A. Fabello) は、体型による日常 / 社会生活での不利益を経験しないことを「痩せ特権 (thin privilege)」と呼んだ上で、たとえスキニー・シェイミングを受け、摂食障害に苦しんだとして

も、痩せていることで無意識の利益を受けている以上、それらは「痩せ特権を無効化しない」(Fabello) と言う。一見すると彼女の見解は、痩せていることを「特権」と結びつける価値観に疑問を呈す、構造批判かのように思える。しかしそこではスキニー・シェイミングの被害や摂食障害の経験が「特権」の名の下に後景化され、そうした耐え難い経験を可能にする諸前提が、「政治的なこと」から遠ざけられてしまう。つまり痩せを特権と繋ぎ合わせる価値観それ自体が、流行の体型に合わせることを要請する「痩せの暴政」の存在と、それによって個々人が経験しうる精神的／身体的苦痛を、個人の経験として矮小化し、脱政治化してしまうのである。それだけでなく、痩せていることと特権とを固く結びつける視点は、逆説的に次のようなメッセージを発信しかねない。過剰に痩せていることが病的であり、いかに「スキニー・ビッチ」だと呼ばれ嘲笑を浴びせられるようなものであっても、痩せていること自体は相も変わらず特権であり、あなたは痩せるだけで、その力を身に着けることができるのだ、と。そして第三波フェミニスト的思想と共鳴するスキニー・シェイミングや痩せ特権の文脈では、太った身体は特権から疎外された身体として提示されるのだが、そこでは肥満が個々人の健康に与える悪影響もまた後景化されてしまう。

六〇年代以降に女性の理想的体型として流布されてきた、ツイギーやケイト・モスのようなスキニーな身体は、その理想化の見直しがフェミニズムによってなされた九〇年代を経て、二〇〇〇年代には、第三波フェミニズムの思想と共鳴しながら、白人で、中流階級で、シスジェンダーで、異性愛者の「バカな女」、すなわち「痩せているスキニー・ビッチ」の象徴となった。そしてその過程では、これまでフェミニズムが取り組んできた痩せを強いるセクシズムへの批判が、しばしばスキニーな個々人への嘲笑／非難へと矛先を変えた。

さらに、痩せていること自体が特権と見なされるような言説の内部では、スキニーな身体に向けられるそうした嘲笑／非難の耐え難さ、そして摂食障害を抱える人々が経験する身体的／精神的苦痛が、矮小化される。つまりスキニーな身体は、いまや批判されるべき「ピッチ」の象徴であり、しかし特権を享受できる人物の象徴でもあるという、アンビヴァレントな意味合いが書き込まれる磁場となっているのである。

結論

本稿でわたしは、痩せていることに対する受容が、西洋の視覚文化においてどのように移り変わっていったのかを確認した。痩せを女性美と結びつける価値観は、一九二〇年代および一九六〇年代に第一波／第二波フェミニズムのメッセージと共鳴する形で出現したが、一九八〇年代後半にはフェミニズムの内部で再考されるようになった。そして一九九〇年代以降になると、それまで美の象徴とされていたスキニーな身体に、病的で軽薄な女性のイメージが重ねられるようになった。しかしそこでは、痩身を女性に強いるセクシズムの構造批判が、痩せている個人の嘲笑へと姿を変えてしまい、特定の身体を理想化する文化の影響力が後景化され、脱政治化されていた。痩せに関するフェミニズムの先行研究と西洋の視覚文化におけるテキストを概観することで、わたしはこれらのことを例証したつもりだ。

確かに現代では、体型の多様性を歓迎する動きが日に日に強まっている。二〇一七年には、体型やサイズ、肌の色に囚われない多様なモデルを起用したファッションショーである「アンチ・ヴィクトリアズ・シークレット・ランウェイ・ショー」("The anti-

Victoria's Secret Runway Show"」や「リアル・キャットウォーク ("The Real Catwalk")」が開催された。痩せたモデルばかりを起用し続けたヴィクトリアズ・シークレットが二〇一九年のショーを中止したことを踏まえれば、これらの政治的意義は確かに大きいのかもしれない。しかしそれでも、既存の社会秩序に抵抗しているかのように見えるこうした動きが、まさに広告産業、消費経済、そしてメディアの商業的戦略の内部に組み込まれていることには留意しなければいけない。リゾー (Lizzo) はその大きな身体にクールなファッションを纏い、カルヴァン・クラインはカーヴィなトランスジェンダーのアフリカン・アメリカンモデルであるジャリ・ジョーンズ (Jari Jones) を起用する——まるで彼女の曲を聴き、カルヴァン・クラインの服を着ることで、ボディ・イメージの問題が緩和されるかのように。

さらに言えば、ボディ・ポジティヴィティの動きがいくら強まったとはいえ、女性に痩せを強いる社会文化のプレッシャーは消失してなどいない。アメリカでは一三歳の少女の五〇%が、一七歳の少女の約八〇%が自身の体型に不満を抱き、一〇代女性の約八〇%が太ることを恐れているという (Kearney-Cooke & Tieger)。失敗を繰り返すことを前提としたダイエット産業は依然衰退せず、脂肪吸引は相変わらず人気の美容整形手術のひとつのままで、ビヨンセやキム・カーダシアン (Kim Kardashian) のような大きな胸と豊かなヒップに引き締まったウエストという非現実的に思える身体は美の象徴として鎮座し続けているし、アリアナ・グランデ (Ariana Grande) のようなストレートなシルエットの女性も人気を誇っている。スキニー・ビッチがいかに「バカな女」として語られようとも、痩せていることを美と結びつけ、そうなることを女性に強いる社会文化のプレッシャー自体は、決して消え失せてなどい

ないのだ。美の基準は衰えているというよりはむしろ、様々な形で増殖し、より強力な力でわたしたちに主体＝従属化を要請している。だからこそ、あらゆる類のメディアが（再）生産する美の基準に標準を当て、どのような身体が理想的なものとして立ち現れるのか、それはどのような身体と共存するのか、それらがいかに特定の身体を否定することで生み出されるのか、その否定はどのような形でなされ、そこで何が後景化されていくのかを、わたしたちは常に読み直していかなければならないのだ。

引用文献

- Adegoke, Yomi. "Meghan Trainor and Nicki Minaj's 'Booty Songs' Aren't as Body Positive as Everyone Thinks They Are." *Independent*, 9 Oct. 2014, www.independent.co.uk/voices/comment/meghan-trainor-and-nicki-minajs-booty-songs-arent-as-body-positive-as-everyone-thinks-the-y-are-9782966.html. Accessed 23 Jan. 2021.
- "A New Policy Against Self-Harm Blogs." *Tumblr Staff*, 23 Feb. 2012, staff.tumblr.com/post/18132624829/self-harm-blogs. Accessed 23 Jan. 2021.
- Bartky, Sandra Lee. "Foucault, Femininity and the Modernization of Patriarchal Power." *Writing on the Body*, edited by Katie Conboy, Nadia Medina, and Sarah Stanbury, Columbia UP, 1997, pp.129-54.
- Bordo, Susan. *Unbearable Weight, Tenth Anniversary ed.*, U of California P, 2003.
- Bray, Abigail. "The Anorexic Body." *Cultural Studies*, vol. 10, no. 3, 1996, pp.413-29.
- Brumberg, Joan J. *Fasting Girls*, First Vintage Book ed., Vintage, 2000.
- Chernin, Kim. *The Obsession*, Kindle ed., HarperCollins e-books, 1981.
- Costello, Brid. "Kate Moss: The Waif That Roared." *WWD*, 13 Nov.

- 2009,
www.wwd.com/beauty-industry-news/beauty-features/kate-moss-the-waif-that-roared-2367932/. Accessed 23 Jan. 2021.
- Fabello, Melissa A. "Let's Talk about Thin Privilege." *Everyday Feminism*, 25 Oct. 2013,
everydayfeminism.com/2013/10/lets-talk-about-thin-privilege/.
 Accessed 23 Jan. 2021.
- Ferreday, Debra. "Haunted Bodies." *Borderlands*, vol. 10, 2011,
www.borderlands.net.au/vol10no2_2011/ferreday_bodies.htm.
 Accessed 5 Sep. 2020.
- Freedman, Rita. *Beauty Bound*. D. C. Health and Company, 1986.
 (リタ・フリードマン、『美しさという神話』常田景子訳、新宿書房、一九九四年)
- Freedman, Rony, and Kim Barnouin. *Skinny Bitch*. Running Press, 2005. (ロリー・フリードマン、キム・バーノウィン、『スキニービッチ』、ウェア美由紀訳、ディスカバー・トゥエンティワン、二〇〇八年)
- Gariano, Francesca. "Nikki Glaser Apologizes to Taylor Swift for Resurfaced Body Shaming Comments." *Today*, 3 Feb. 2020,
www.today.com/popculture/miss-americana-nikki-glaser-apologizes-taylor-swift-t172987. Accessed 23 Jan. 2021.
- George, Lynell. "Nurturing an Anorexia Obsession." *Los Angeles Times*, 12 Feb. 2002,
www.latimes.com/archives/la-xpm-2002-feb-12-lv-proana12-story.html. Accessed 23 Jan. 2021.
- Gill, Rosalind. "Post-Postfeminism?" *Feminist Media Studies*, vol. 16, no. 4, 2016, pp.610-30. (ロザリンド・ギル、『ポスト・ポストフェミニズム?』、河野真太郎訳、『早稲田文学』、二〇二〇年春号、一五六 - 八三頁)
- Gilman, Sander L. *Health and Illness*. Reaktion Books, 1995. (サンダー・ギルマン、『健康と病』、高山宏訳、ありな書房、一九九六年)
- "Government 'Summit' over Thin Models." *BBC News*, 10 Apr. 2000,

- news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/politics/708186.stm.
 Accessed 23 Jan. 2021.
- Grogan, Sara. *Body Image*. 2nd ed., Routledge, 2008.
- Guthman, Julie, and Melanie DuPuis. "Embodying Neoliberalism." *Environment and Planning D: Society and Space*, vol 24, 2006, pp. 247-448.
- Harris, Anita. "Introduction." *Next Wave Cultures*, Routledge, 2007.
 (アニタ・ハリス、「ネクスト・ウェーブ・カルチャー」、田中東子訳、
 『早稲田文学』、二〇二〇年夏号、二〇〇 - 一一頁)
- Heyes, Cressida J. *Self-Transformations*. Oxford UP, 2007.
- Holden, Michael. "Model Kate Moss Criticized for "Skinny" Remark." *Reuters*, 19 November 2009,
www.reuters.com/article/us-moss/model-kate-moss-criticized-for-skinny-remark-idUSTRE5AI32B20091119. Accessed 23 Jan. 2021.
- "Initiative for Health, Safety, and Diversity." The Council of Fashion Designers of America, Inc,
cfda.com/philanthropy/initiative/initiative-for-health-safety-and-diversity. Accessed 23 Jan. 2021.
- "Italy Bans 'No Anorexia' Poster." *BBC News*, 20 Oct. 2007,
news.bbc.co.uk/2/hi/europe/7053725.stm. Accessed 23 Jan. 2021.
- Kearney-Cooke, Anne., and Diana Tieger, "Body Image Disturbance and the Development of Eating Disorders." *The Wiley Handbook of Eating Disorders, Assessment, Prevention, Treatment, Policy, and Future Directions*, edited by Linda Smolak and Michael P. Levine, John Wiley & Sons, 2015, pp. 283-296.
- "Kate Moss Criticized after Skinny-is-Good Remark." *The Seattle Times*, 19 Nov. 2009,
www.seattletimes.com/entertainment/kate-moss-criticized-after-skinny-is-good-remark/. Accessed 23 Jan. 2021.
- Kristeva, Julia. *Pouvoirs de l'horreur. Le Seuil*, 1980. (ジュリア・クリステヴァ、『恐怖の権力』、枝川昌雄訳、法政大学出版局、一九八四年)
- Levenkron, Steven. *The Best Little Girl in the World*, Paperback ed.,

- Grand Central P, 1989. (スティーヴン・レヴェンクロン、『鏡の中の少女』杵渕幸子、森川那智子訳、集英社文庫、一九八七年)
- McMahon, Barbara. "Catwalk Ban on the Skinny Model in Italy." *The Guardian*, 3 Dec. 2006,
www.theguardian.com/world/2006/dec/03/italy.barbaramcmahon#:~:text=Stick%2Dthin%20women%20are%20to,country%20to%20take%20unhealthy%20modelling.&text=The%20row%20was%20given%20impetus,died%20suffering%20from%20eating%20disorders.
Accessed 23 Jan. 2021.
- Mean Girls. Directed by Mark Waters, Paramount Pictures, 2004.
- Minaj, Nicki. "Anaconda." *The Pinkprint*, Young Money Entertainment, Cash Money Records, and Republic Records, 2014.
- Miss Americana. Directed by Lana Wilson, performance by Taylor Swift, 23 Jan. 2020. Netflix,
www.netflix.com/watch/81028336.
- Not Another Teen Movie. Directed by Joel Gallen, Sony Pictures, 2001.
- Orbach, Susie. *Hunger Strike*, First American ed., W. W. Norton & Co., 1986. (スージー・オーバック、鈴木二郎他訳、『拒食症』、新曜社、一九九二年)
- Pearson, Ashley. "The Bizarre Diet Secrets of the Stars." *Daily Mail Online*, 13 Mar. 2008,
www.dailymail.co.uk/tvshowbiz/article-532608/The-bizarre-diet-secrets-stars.html. Accessed 23 Jan. 2021.
- P!nk. "Stupid Girls." *I'm Not Dead*, LaFace, 2006.
- Rancière, Jacques. *Le Spectateur émancipé*, La Fabrique, 2008. (ジャック・ランシエール、『解放された観客』、梶田裕訳、法政大学出版局、二〇一三年)
- Reel, Justin J. "Pro-Ana." *Eating Disorders*, edited by Justin J. Reel, Greenwood, 2013, pp.366-68.
- Rouleau, Codie R. & Kristin M. von Ranson. "Potential Risks of Pro-Eating Disorder Websites." *Clinical Psychology Review*, vol. 31, issue 4, 2011, pp.525-31.

- Supersize vs Superskinny. Remarkable Television, Channel 4, 2008.
- Thrift, Samantha. "Beyond Bootylicious." *Singing for Themselves*, edited by Patricia Spence Rudden, Cambridge Scholars P, 2007, pp. 105-26.
- Trainor, Meghan. "All about that Bass." Title, Epic Records, 2014.
- Warin, Megan. *Abject Relations*. Rutgers UP, 2010.
- Wolf, Naomi. *The Beauty Myth*, William Morrow & Co, 1991. (ナオミ・ウルフ、『美の陰謀』、曾田和子訳、TBS プリタニカ、一九九四年)
- Wren, Christopher S. "Clinton Calls Fashion Ads 'Heroin Chic' Deploable." *The New York Times*, 22 May 1997, www.nytimes.com/1997/05/22/us/clinton-calls-fashion-ads-heroin-chic-deplorable.html. Accessed 23 Jan. 2021.
- 海野弘、『ダイエットの歴史』、新書館、一九九八年